

祖堂集卷第六

石頭下卷第三曹溪第五代法孫

投子和尚、翠微に嗣ぐ、舒州相城県に在り。師諱は大同、舒州懷寧県の人なり。姓は劉。東都の保唐滿禪師の下に受業せり。初め小乗を習い、定めて非なることを知りて捨つ。次いで広く海蔵を窮め、博く幽深を悟れり。便ち翠微に造りて師に問う、未審し二祖は初めて達摩に見えて、は当た何の得る所ありや。翠微答えて曰く、汝は今、吾を見て復た何の得る所ありや。師乃ち玄塀に伏膺し、心を他往に息む。

・玄塀 幽玄な世界。

又た因みに一日、翠微の法堂に在りて行道せる次いで、師にして近前し、接礼して問うて曰く、西來の密旨、和尚は如何にして人に指示するや。翠微は歩を駐むること須臾。師又た進んで曰く、請う和尚指示せよ。翠微答えて曰く、事須く第二杓の惡水漿の潑することを要む可からざるに作摩そも。師、言下に於いて旨を承け、礼謝して退く。翠微云く、採却すること莫れ。師曰く、時至らば根苗自ら生えん。

・採却 逃げかくれする。採は躲に通じる。

師又た問う、曾つて聞く、丹靄、木仏を焼くと。和尚は何を以て羅漢に供養するや。翠微云く、焼くも亦た焼き著せず。供養するも亦た一に供養するに任ず。

・焼不著 焼きおおせない。

・供養亦一任供養 供養といつてもわしが勝手にやっているだけだ。

師既に言を承けて旨を領し、性に任せて逍遙す。人間に放曠し、勝槩を周遊す。旋りて故里を経て、投子山をトして終焉の志し有り。乃ち初めて菴茨を立て、栖心遁迹す。

乾符中和の際に及んで鼎沸鯨呑し、荆越楚吳、戈 競い耀く。狂戎交も扇ぎ、桀原作樑、蹠縦横す。豈に唯だ国邦を殲殄するのみならんや、抑も亦た仏寺を摧残す。

時に暴殄の魁帥有り、刃を庵前に執つて声を厲して曰く、和尚は此間すかんに在りて什摩をか作す。師曰く、吾れは此間すかんに在りて心を伝う。魁帥云く、个の什摩、心をか伝つる。師曰く、仏心なり。魁帥低首して良久し、顔を解きて曰く、和尚家は大いに不思議にして、我輩の凶る所には非ず、と。則ち、劔を匣膜に内れ、各おの服玩を脱ぎ、用いて施して去れり。介れより日に禅流の相訪う有り。

人有り問うて曰く、凡聖相去ること幾何ぞ。師、繩床を下りて立つ。

問う、一物を將ち来たらざるに、什摩なんと為てか却つて放下著と言う。師云く、辛苦。

・ 辛苦 俗語。しくらうさん。

与摩に來たりて最も親しき処を問う、乞う師、一言せよ。師は杖を以て之を敲けり。僧曰く、什摩と為てか道わざる。師云く、汝は争でか与摩に好悪を識らざるを得たる。

・ 敲之 相手をたたいた。

・ 不識好悪 もののけじめがつかない。一人前でないことをいう。

問う、古人道わく、百年後、山下に一頭の水牯牛と作らんと。意作摩生そもさん。師云く、常住を輓かんが為なり。僧曰く、常住を輓か

ざる時作摩生。師云く、又た俗人を鞆く。

・常住 不動産。

問う、大庾嶺頭に趁得及するに、什摩と為てか提不起なる。師は納衣を提起せり。僧云く、這个を問わず。師云く、你を見るに提不起なり。

・趁得及 追いつき得た。

・提不起 もち上げられない。

問う、仏仏授授し、祖祖相伝す、未審し个の什摩をか伝つる。師曰く、年老いたり、争でか謾語を受けん。

問う、咽喉嚙物を併却して、請う師道え。師曰く、汝、只だ要むるのみにして、我れは道い得ず。

問う、達摩未だ来たらざる時如何ん。師曰く、天に遍く地に遍し。僧曰く、来たりし後は如何ん。師曰く、盖覆し得ず。

問う、諸聖は何よりして證せりや。師曰く、病有りて薬を服するを仮らず。僧曰く、与摩ならば則ち修證を仮らず去るなり。師曰く、長嘖長喜す可からず。

問う、省要の処は還た信を通ずるや。師曰く、是れ你与摩に我に問う。僧曰く、如何んが識得せん。師曰く、識る可からず。僧曰く、畢竟作摩生。師曰く、直に是れ省要なり。

問う、如何にしてか目前の機を犯さざるを得ん。師曰く、犯せり。僧曰く、いすこ什麼処こは是れ犯せる。師曰く、せらい適来は什麼と道いしぞ。

問う、古人道わく、急に相応せんと要せば、唯だ不二と言うのみ。と。未審し和尚は作摩生。師曰く、汝、我に問え、我更に道わん。僧曰く、作摩生か道わん。師曰く、唯だ不二と言うのみ。

・未審和尚作摩生 和尚さんは何と仰いますか。

・汝問我、我更道 問いなおせ、答えなおそつ。

師は有る時云く、諸方は一切句もて一句を道い尽くす。老僧は則ち然らず。一句もて一切句を道い尽くす。僧進んで問う、如何なるか是れ和尚の一句もて一切句を道い尽くす底の句。師曰く、今日上堂して妙子の飯を喫す。

・上堂 食堂に上る。

問う、古人の言う有り、解語は舌に関するに非ず、能言は是れ声に非ず、と。如何なるか是れ解語。師曰く、一切惣に道い得。如何なるか是れ舌に関するに非ず。師曰く、耳の音声を聴く無し。

・解語 ものを言うことができる。

・能言 弁が立つ。

・無耳聴音声 音を聞く耳がない。

問う、古人の言う有り、目前に法無し、意は目前に在り、と。作摩生か是れ目前に在る意。師曰く、狂妄ならず。僧曰く、作摩生。

師曰く、他は是れ目前の法ならず、耳目の到る所には非ず。

・古人 夾山善会。

趙州、投子に到る。山下に鋪有り。人に向かつて問う、投子は那裏なるや。俗人对えて曰く、問つて什摩をか作す。趙州云く、久しく和尚を嚮つ。礼謁せんと欲得す。俗曰く、近きことは則ち近きも、山に上ることを用いず。明日早朝に來たりて錢を乞わん、他を待ちて相見せよ。趙州云く、若し与摩ならば、和尚の來たる時、他に向かつて納僧在裏と説うこと莫れ。俗人唱喏す。師果然原文は下に是の字があるとして下り來たりて錢を乞えり。趙州便ち出で來たり把駐して云く、久しく投子を嚮つ、只だ這个便ち是なること莫きや。師は纒かに此の語を聴くや、便ち側身して退く。師又た箴籬を拈起して云く、塩錢些子を乞取す。趙州走りて裏頭に入る。師便ち山に歸れり。

・在裏 居る。裏は現代語の呢に当たり、だめ押しの語氣。

・把駐 把住に同じ。

・纒 くした途端。くや否や。

・側身退 只這个をひっぱらずしたところ。

・裏頭 なか。鋪を指す。

趙州は落後、投子に到れり。便ち問う、死中に活を得る時如何ん。師云く、夜行を許さざれども、明に投じて須らく到るべし。趙州便ち下り來たりて一直に走る。師は沙弥に教すらく、你去きて他に問え、我が意作摩生と。沙弥便ち去きて趙州を呼べり。趙州、頭を廻らす。沙弥便ち問う、和尚与摩に道う、意作摩生。趙州云く、个の太伯に遇著せり。沙弥歸りて拳似せり。師便ち大笑す。

・落後 あとで

・不許夜行、投明須到 夜行は許さないが、夜が明けると同時に到着していねばならぬ。

・一直 まっしぐら。

・師教沙弥你去問他 直接間接の話法がごっちゃになっている。

・太伯 おじさん。

僧有り雪峯に拳似し便ち問う、只だ古人の与摩に道うが如きは、意作摩生。雪峯曰く、將に為^{おも}えり我は胡伯なりと、更に胡伯の在る有り。

・將為我胡白、更有胡伯在 伝灯録十五では「我早候白、伊更候黒」となっている。どっこい上手がいた、という意味。

僧、黄竜に問う、古人道わく、夜行を許さざれども、明に投じて須らく到るべし、と。意作摩生。黄竜曰く、飯を嚼んで魯伯に啜す。

・啜 喂に通じる。家畜にえさをやる。母が赤子に口つつしに食物を与える。

又た問う、未だ四祖に見えざる時如何ん。師曰く、在り。見えし後如何ん。師曰く、在り。

・ここら辺よりテキストに混乱あり。

師、僧に問う、什摩処よりか来たれる。対えて曰く、雲居より来たれり。師曰く、此間^{すかん}の地^{いすれ}に何似ぞ。僧無对。却帰して雲居に拳似せり。雲居云く、南に雪峯有り、北に趙州有り。

・何似 二つのものを比較して、前者は後者にくらべてどつだと問う。後者の方がましではないかという含みの場合が多い。

・此問 二二。

・南有雪峯、北有趙州 當時の通り言葉。

師又た纔かに門を開き了るや、便ち東觀西觀せり。大衆一時に走り上る。師便ち門を闕却せり。

僧有り石門に問う、投子、門を闕す、意作摩生。門云く、門を闕すすら尚お会せず。門を闕さざる、侂は何摩処に向かつてか会せん。

師有時云、侂諸人 閑処。脱不可得相応、亦無量劫来向一切処 心著急、自己事却是閑事。所以難得相稱、莫因修各自弁事。莫

待臨脱衣時、方始慌忙不及也。老僧此間無巧言

人咬嚼、只是随汝問処祇对。汝若不問

向什摩処道則得。若更向汝道向

上向下 事尽是走作。侂無了時。侂但莫逐名

走作則了事边亦收管侂不著、却

及諸過患。雖然如此、包羅天

地、含 不同於量万 不差殊直

取 示簡要

曰鋤地

不依一法。

問う、便ち請う和尚直指せよ。師は噀せり。僧曰く、即ち這个か、別に更に有りや。師曰く、閑言語すること莫れ。

・噀 せきをした。

師は甲戌の歳四月六日、跏趺して端坐し、俄然として化に順えり。春秋九十六、僧夏七十六なり。

礪州如禪師、荷沢に嗣ぎ、益州惟忠和尚、礪州如に嗣ぎ、遂州円禪師、惟忠に嗣ぎ、草堂和尚、円禪師に嗣ぐ。師諱は宗密、未だ行録を觀ざれば、終始を叙べず。

師は内外該原作諺瞻し、朝野欽敬す。数本の大乗の經論疏鈔、禪詮百卷、礼懺等を制し、域内に伝わるを見る。臣相裴休は深く礼重を加え、為に碑文を制せり。詢奘射人、頗る時譽を彰す。定慧禪師青蓮の塔と勅諡す。

・詢奘 不詳。

有る時、史山人、草堂和尚に十問す。

第一問に曰く、云何なるか是れ道。何を以てか之を修する。為復必ず須く修成すべきや、為復功用を仮らざるや。禪師答えて曰く、無礙是れ道、妄を覺する是れ修。道は本より円かなりと雖も、妄起りて累を為す。妄念都べて尽くす即ち是れ修成なり。

第二問に曰く、道若し修に因りて成らば即ち是れ造作なり。便ち世間法の虚偽不実にして、成りて復た壞するに同じ。何ぞ出世と名づけん。師答えて曰く、造作は唯だ是れ業を結ぶのみにして、虚偽の世間と名づく。無作はれ修行にして、即ち真実出世なり。

第三問に曰く、其の修する所の者は為た頓なりや為た漸なりや。漸ならば則ち忘前失後、何を以てか集合して成らん。頓ならば即ち万行多方、豈に一時に円満することを得んや。師答えて曰く、真理は即ち悟りて頓円なり。妄情は之を息めて漸く尽くす。頓円は初生の孩子の一日にして肢体已に全きが如し。漸修は長養して成人し多年にして志気方めて立つが如し。

第四問に曰く、凡そ心地を修するの法は、為当心を悟りて即ち了するや、為当別に行門有りや。若し別に行門有らば、何ぞ南宗の頓旨と名づけん。若し悟らば即ち諸仏と同じからん。何ぞ神通光明を發せざるや。師答えて曰く、水池にして而も全水なることを識り、陽氣を籍りて鎔融す。凡夫にして而も即真なることを悟り、法力を資りて修習す。氷消えれば則ち水流潤し、方めて漑滌の功を呈す。妄尽きて即ち心靈通じ、始めて通光の応を發す。修心の外に別の行門無し。

第五問に曰く、若し但だ修心して得仏するならば、何故に諸経は復た必ず須く仏土を莊嚴し、衆生を教化すべし、方めて成道と名

づくと言ふや。師答えて曰く、鏡明らかにして影像千差し、心淨くして神通万応す。影像は仏国を莊嚴するに類し、神通は即ち衆生を教化す。莊嚴して而も即ち莊嚴するには非ず、影像も亦た色にして而も色には非ず。

第六問に曰く、諸経は皆な説く、衆生を度脱し且つ衆生は即ち衆生には非ず、と。何故に更に度脱を勞するや。師答えて曰く、衆生若し實に之を度せば即ち勞すると為す。既に自ら云く、即ち衆生には非ずと。何ぞ度して而も度すること無きに例せざらん。

第七問に曰く、諸経は仏は常住なりと説き、或は即ち仏滅度すと説く。常ならば即ち滅せず、滅すれば即ち常には非ず。豈に相違せざるや。師答えて曰く、一切相を離るれば即ち諸仏と名づく。何ぞ出世人滅の實有らん。出没を見る者は機縁に在り。機縁応ずれば即ち菩提樹下にして出現し、機縁尽きれば即ち沙羅林間にして涅槃す。其れ猶お淨水は無心にして、像として現せざるは無きも、像は我有には非ざるが如し。蓋し外質の去來の相は仏身には非ず、豈に如來の出没ならんや。

第八問に曰く、云何んが仏化の生ずる所、吾は彼の如くに生ずるなる。仏は既に無生ならば、生は是れ何の義なりや。若し心生ずれば法生じ、心滅すれば法滅すと言わば、何を以てか無生法忍を得んや。師答えて曰く、既に如化と云う。化は即ち是れ空なり。空ならば即ち無生なり。何ぞ生の義を詰らん。生滅滅し已つて寂滅するをば真と為す。此の法の無生を忍可するをば名づけて無生法忍と曰う。

第九問に曰く、諸仏成道し説法するは只だ衆生を度脱せんが為なり。衆生は既に六道有り、仏は何ぞ但だ人中に住在して化を現するや。又た仏滅後、法を迦葉に付し、以心伝心して乃ち此の方の七祖に至るに毎代只だ一人に伝うるのみ。既に一切衆生に於いて皆な一子の地を得たりと云うに、何を以て伝授は普かざるや。師答えて曰く、日月は天に麗き、六合俱に照らして而も盲者は見ず。盆下知らざるも日月は普かざるには非ず、是れ障隔の咎なり。度と不度とは義類斯くの如し。人天に局りて鬼畜を揀ぶには非ず。但だ人道は能く結集して伝授絶えざるが故に、只だ仏の人中に現わるるを知るのみ。滅度の後、迦葉に委付し、展転して相承するの一人のみなる者は、此れ亦た蓋し当代を論じて宗教の主と為すこと、土に二王無きが如し。得度の者の唯だ爾の数なるのみには非ず。

第十問に曰く、和尚は何に因りて発心し、何法を慕いて出家せるや。今は如何に修行し、何の法味を得たるや。行ずる所は何処の

地位に至るを得たるや。今住心するや、修心するや。若し住心すれば修心を妨げん。若し修心すれば即ち動念して安からざらん。云何にして名づけて学道と為すや。若し安心一定すれば即ち何ぞ定性の徒に異ならん。伏して願わくば、大徳、大慈悲を運び、理の如く如の如く、次第して為に説け。長慶四年五月日、史制誠謹んで問う。師答えて曰く、四大は坏幻の如しと覺し、六塵は空花の如しと達し、自心は仏心た為りと悟り、本性は法性為りと見る、是れ修行。無住にして知る即ち法味と為す。法に住著する斯れ動念と為す。故に人の闇に入りて即ち見る所無きが如く、今は住する所無くして染せず著せず。故に人に目及び日光有りて明らかに種種法を見るが如し。豈に定性の徒と為さんや。既に住著する所無し、何ぞ処所と階位とを論ぜん。同年同月二日、沙門宗密謹んで對つ。史山人は自後煩りに心地を討論し、乃ち出家して道の為にするに至れり。

神山和尚、雲岳に嗣ぐ。師諱は僧密。未だ行録あんろくを觀ざれば始終を決せず。

師、洞山と茶を鋤く次いで、洞山、纒頭を抛却して云く、我れ今日困かれて一点の氣力も也た無し。師曰く、若し氣力無くんば、争でか解よく与摩に道い得ん。洞山云く、將に謂えり、氣力有る底是なりと。

・將謂有氣力底是 修行者は氣力を持つていなければならんと勘違いしていました。無氣力の尊さ、懶山の例参照。

因みに裴大夫、僧に問う、供養を下すに仏は還た喫するや。僧曰く、大夫の家先を祭祀するが如し。人有つて雲岳に拳似す。雲岳云く、這個の人は未だ出家せず。師進んで曰く、却つて和尚の道わんことを請う。岳曰く、汝の幾般の飯食、但だ一時に下し来たれ。岳却つて師に問う、他の忽然かれ下し来たる時作摩生。師曰く、却つて須く鉢盂に合取すべし。岳深く之を肯う。

・下供養 供養をさしあげる。

・這個人未出家在 その僧はまだ出家していないぞ。句末の在は強い断定の語氣を表す。

・汝幾般飯食 どれだけの飯食が有るか知らんが。

・他 私も含まれる彼。

・却須合取鉢盂 自分の持つてゐる鉢盂に受け取る。

行者有りて問う、生死事大なり、請う師一言せよ。師曰く、行者は何の時に曾つて死に來たりしや。行者言く、会せず。師云く、若し与摩ならば、須らく死すること一場にし去るべし。

・行者何時曾死來 そつう質問ができるなら、死んだことがあるはずだが、いつ死んだことがあるか。

・須死一場去 一度死んで來なさい。

師、洞山と行脚せし時、寺裏に到れり。洞山は坐禅し、師は一向に睡れり。洞山心悶えて師を喚ぶ。師応諾す。洞山云く、上座還はた会するや。師曰く、会せず。洞山云く、既に会せざるに作摩生か睡る。師云く、会する底の人は還た睡るや。洞山不語。師曰く、一条の繩子もて自ら繫ぐ。

師、針を把る次いで、洞山問う、什摩をか作なす。師曰く、針を把る。洞山云く、作摩生か針を把る。師云く、个个、他と相似す。洞山云く、若し个个有らば則ち相似せず。師却つて洞山に問う。洞山云く、大地一斉に火発す。曹山云く、什摩と為てか寸糸も留めざる。

曹山、僧に問う、作摩生か是れ大地一斉に火発する。对えて曰く、近づき得ず。曹曰く、近づき得ざる是れ火なり。与摩の時還た寸糸を存し得るや。对えて曰く、若し寸糸有れば則ち大火を成さず。曹山肯わず。邈上座云く、与摩の時却つて寸糸を存し得。曹山云く、邈闇梨は是れ問生なり。

・个个 一針一針。

師、洞山と村院に到り、火に向かう次いで、洞山、師に問う、水は何より出づるや。師云く、処の来る無し。洞山云く、三十年同行して任摩の語話を作す。師云く、理長すれば則ち就く、老兄作摩生。洞山云く、只だ且らく漉漉たるのみにして何より出づるかを知らず。

・理長則就 この方が筋が通っていると見たら、それに加担する。

・漉漉 水が吹きだしている音、状態。

洞山和尚、雲岳に嗣ぐ、洪州高安県に在り。師諱は良价、姓は兪、越州諸暨県の人なり。

初め村院に投じ、院の処に出家す。其の院主任持せざるも、師は並びに欺嫌の心無し。兩年を過ぎ得たり。院主は他の孝順なるを見て、伊をして心経を念せしむ。未だ一兩日を過し得ずして念じ得て徹せり。和尚は又た別経に上らしめんとす。師は師に啓して曰く、念ずる底の心経すら尚お乃ち未だ会せず。別経に上るを用いず。院主云く、適来は恻念に念じ得たるに、什摩に因りて未だ会せずと道つや。師曰く、経中に一句語の会せざる有り。院主云く、那裏をか会せざる。師曰く、無眼耳鼻舌身意を会せず。請う和尚、某甲の為に説け。院主は口を杜じて言つ無し。此れより法公は是れ尋常の人ならず。院主便ち領して五洩和尚の処に上り、具さに前事を陳べたり。此の法公は是れ某甲分上の人ならず、乞う和尚撰收せよ。五洩容許す。

・不任持 本気になって受け付けない。

・上別経 この上には卷七雲峯章に似た用例がある。「衆上一千余人」(二一九九頁)。しかし今ひとつ意味がはっきりしない。

・恻念得 なかなか良く心経を念じていると思っていた。

・從此法公不是尋常人也 誤脱があるであらう。

師、撰受を蒙り、三年を過し得たり。後、受戒一切了り、和尚に諮白すらく、師に啓す、某甲、行脚せんと欲得す、乞う和尚処分せよ。五洩云く、排扱下に尋取し、南泉に問取し去れ。師曰く、一たび去きて攀縁尽きなば、孤鶴は巢に來たらざらん。

・排扱 不詳。

師、便ち五洩を辞して南泉に到れり。南泉、帰宗齋に因りて垂語して云く、今日、帰宗の為に齋を設けたるに、帰宗は還た來たるや。衆無對。師出で來たつて礼拝して云く、請う師徴起せよ。南泉便ち問う。師對えて曰く、伴有るを待ちて則ち來たらん。南泉越跳し下り來たつて背を撫でて云く、是れ後生なりと雖も、敢えて彫琢の分有り。師曰く、良を圧して賤と為すこと莫れ。此れに因りて名、天下に播しき、呼んで作家と作なせり。

・請師徴起 私を指名してください。

・越跳 踟跳に同じ。蛙や蝦がびよんびよんはねること。

・敢有彫琢云分 この敢は間違つた用法。

・莫圧良為賤 見そこなつて貰つては困りますよ。

後、雲岳に參じて尽く玄旨を領せり。止ただ大中末間のみ新豊山に住して、大いに禅要を弘む。

・止大中末間住于新豊山 大中の末年頃までは新豊山に居た。

時に人有り問う、学人、和尚の本来の師に見えんと欲する時如何ん。師曰く、年涯相似すれば則ち阻碍無からん。学人再び疑う所を挙す。師曰く、前蹤を躡ままずして更に一問せんことを請う。

雲居代つて云く、与摩ならば則ち某甲は和尚の本来の師に見ゆることを得ず。

後、教上座拈じて長慶に問う、如何なるか是れ年涯相似する。長慶云く、古人は与摩に道つ、教闇梨は這裏に來たつて什麼をか覓むる。

・年涯相似則無阻碍　お前の年頃が本来の師と同じくらいであれば、すらりと行く、会つことができる。

・古人　洞山。

問う、師は南泉に見えたるに、什摩に因りてか雲岳の為に齋を設くる。師曰く、我は他の雲岳の道德を重んぜず、亦た仏法の為ならず、只だ他の我が為に説破せざりしことを重んずるなり。

・道德　人から、人格。

・不為仏法　設齋は雲岳の仏法のためにはない。

・説破　これはこうだと一つ一つ割り切つて示す。結論を与えてしまつ。

問う、如何なるか是れ毘盧の師、法身の主なる。師曰く、禾莖粟柄。

・禾莖粟柄　地面に生えている稲、粟。

師、百顔に到る。顔問う、近ごろ什摩処を離れしや。師曰く、近ごろ湖南を離れたり。顔云く、看原作官(察使は姓は什摩ぞ。師曰く、他の姓を得ず。顔云く、名は什摩ぞ。師曰く、他の名を得ず。顔曰く、還た嘗つて出でしや。師曰く、嘗つて出でず。顔曰く、合た事を句当するや。師曰く、自ら郎幕有り。顔曰く、出でざると雖も合に事を処分すべし。師乃ち払袖して出づ。

百顔は宿を経て、自ら得ざりしことを知り。入堂して問う、昨日の二頭陀は何に在りや。師曰く、某甲是なり。顔曰く、昨晚は

闇梨に對したりと雖も、一夜不安にして仏法の大いに難く大いに難きことを將知せり。頭陀に陪隨せん。便ち代語せんことを請つ。師代わつて云く、也た太だ尊貴なり。

- ・ 出 役所から出て地方を見まわる。
- ・ 句当 役目を果たす。

・ 自有郎幕在 私には乾分がいるから自分でする必要はない。在は強辭。

・ 処分事 命令したり、報告したり。

・ 將知 將にはほとんど意味がない。將息、將養、將恐も同じ。

・ 代語 処分事の代わり。

・ 也太尊貴 またそりゃ大したお偉い身分ですね。直接には看察使のこと。

因みに雲岳、院主の石室に遊べるに問つて云く、汝は去きて石室の裏許なかに入れり、只だ与摩に便ち廻り來たること莫れ。院主無對。師云く、彼中かしこに已に人有りて占め了れり。岳云く、汝更に去きて什摩をか作す。師云く、人情は断絶し去る可からず。

・ 莫只与摩便廻來 そんな帰り方をしてはいけない。

・ 人情 人間世界を成り立たせている筋道。

問つ、如何なるか是れ西來意。師云く、太だ解難の犀に似たり。

・ 解難 にわとりを解剖する。伝灯録十五は「駭解難犀」、にわとりをおどるかす犀。西と犀とをかけ言葉にしてあるか。犀

の居るところに米を撒いてもにわとりは恐がつて近づかない。

人有つて洞山に問う、時時に勤めて払拭するは大殺はなはだ好きに、什摩に因りてか衣鉢を得ざる。洞山答えて曰く、直に本来無一物と道つも也た未だ衣鉢を得ず。進んで曰く、什摩人か合に衣鉢を得べき。師曰く、門を入らざる者得。進んで曰く、此の人還はた受くるや。師曰く、受けざると雖然いふとも他に与えざるを得ず。

問う、蛇の蝦蟆を呑む、救うこと則ち是なるか、救わざること則ち是なるか。師云く、救うときは則ち双目観ず、救わざるときは則ち形影彰われず。

・救則云 助けるとするなら蛇もかえるも見ない。助けないとするなら助けるものとしての形影は現れない。能所を超える、消してしまふということか。無縁の大悲。双目は救う方の目。

雲岳齋に因りて人有りて問う、和尚は先師の処に於いて、何の指示を得しや。師曰く、我は彼中に在りしと雖も、他の指示を蒙らず。亦た敢えて他に辜負せず。又た齋を設くる次いで問う、和尚は先師の齋を設く、還た先師を肯うや。師曰く、半ば肯い半ば肯わず。僧曰く、什摩と為てか全くは肯わざる。師曰く、若し全く肯わば則ち先師に辜負せん。

僧拈じて安国に問う、全く肯わば什摩と為てか却つて辜負することを成す。安国曰く、金屑は貴しと雖も。白蓮云く、児を認めて爺と作す可からず。

有る人拈じて鳳池に問う、如何なるか是れ半ば肯う。鳳池云く、今日よりし去り、向人且留親見。如何なるか是れ半ば肯わざる。鳳池云く、還た是れ汝の肯う底の事なりや。僧曰く、全く肯わば什摩と為てか先師に辜負する。鳳池云く、合頭を守護すれば則ち出身するに路無し。

・辜負 孤負に同じ。せつかくのこころざしをあだにする、無にする。裏切る。

・金屑雖貴 落眼成翳という下の句が省かれている。諺。黄金の細片は貴重な品だが、眼に入ったら眼病を起こす。

・不可認兒作爺 自分の子を父と思つてはいけないぞ。

・從今日去 今日という今日からは。齋を設けたその日からは。以下読めない。

・還是汝肯底事摩 いったいそれがお前の肯いようなのか。

・守著合頭則出身無路 合頭を金科玉条とするとだめだ。合頭は型にはまった絶対の真理。

問う、三身中阿那个身か衆数に墜せざる。師曰く、吾常に此に於いて切なり。僧、曹山に問う、先師道わく、吾れ常に此に於いて切なり、と。意作摩生。曹山云く、頭を要すれば則ち斫り將去れ。雲峯に問う、雲峯、杖を以て欄口に擲して云く、我も亦た曾つて洞山に到り来たり。

・不墜衆数 一切のカテゴリーを超えている。

・切 生死の一大事としている。いつも気にかかっている、気を付けている。

・要頭則斫將去 わしの首が欲しければ切れ。

・欄口擲 口を遮えぎって打つ、人ごとみたいに言っているところを。

・我亦曾到洞山来 洞山のところに行ったことがあった。

因みに夜、点灯せず、僧有り出で来たつて問話せり。師、侍者を喚んで点灯し来たらしむ。侍者点灯し来たる。師曰く、適来問話せる上座、出で来たれ出で来たれ。其の僧便ち出づ。師曰く、三両の粉を將取して這个の上座に与えよ。僧払袖して出づ。

後、此れに因りて入路を得、衣鉢を將つて一時に齋を設けたり。三五年を得し後、和尚を辞せり。和尚云く、善く為せ、善く為せ。雪峯、身边に在りて侍立し、問う、者个の上座は適来辞し去りしが、幾時にか再び来たらん。師云く、只だ一たび去ることを知るの

みにして、再び来たるを知らず。此の僧、堂の衣鉢下の座に帰りて遷化せり。雪峯、上座の遷化せるを見て便ち師に報ぜり。師曰く、此くの如しと雖然も、猶お老僧と三生を教す。

・三両 三匆。

・粉 おしろい？

・入路 悟入への手がかり。

・善為 元気にやんなさい。気をつけてな。

・衣鉢下座 衣鉢の置いてある自分の坐禅の席。

・雖然如此、猶教老僧三生在 なかなかのやり手だが、わしとは三生分の差がある。教は校、較に通じる。

又た一家の拳は則ち別なり。

因みに两个の僧、同行と造る。一人は不安にして涅槃堂裏に在りて将息し、一人は他を看る。有る一日、不安底の上座、同行を喚びて云く、某甲は去かんと欲得す。一時に相共に去かん。对えて曰く、某甲は未だ病有らず、作摩生か相共に去かん。病僧云く、得ず。此来同行にし去る、也た須らく同行にし去つて始めて得べし。对えて曰く、好し、与摩ならば則ち某甲は去きて和尚に辞せん。其の僧、和尚の処に到りて、具さに前事を説きたり。師云く、一切事は你に在り、善く為せ、善く為せ。其の僧、涅槃堂裏に去き、兩人対坐し、説話一切せし後、当胸合掌して峭底に便ち去けり。雪峯、法席に在りて飯頭と造り、其の次第を見て便ち和尚の処に去きて説く、適来和尚を辞せる僧、涅槃堂裏に去きて、兩人対坐して遷化せり、極めて是れ異なり。師云く、此の兩人は只だ解く、与摩に去くのみにして、転(原作傳)じ来たる解わず、老僧と三生を隔つ。

・不得 だめだ、あかん。強い拒否。

・峭底 ひっそりと、もの音をたてない、いつ死んだか解らない死に方。普通は峭地。祖堂集のみは「底」を副詞の語尾に

使つ。峭は情に通じる。

・与老僧隔三生在 与の字の上に、原文は若也の二字がある。

師有る時、衆に示して曰く、吾に閑名の世に在る有り、誰か能く吾の与に除き得る。沙弥有り出で来たつて云く、師の法号を請つ。師白槌して曰く、吾が閑名は已に謝せり。

石霜下に代の字あり云く、人の他の肯つことを得るもの無し。進んで曰く、閑名の世に在るを争那何んせん。霜曰く、張三季四は他人の事なり。雲居代わつて云く、若し閑名有らば、吾が先師には非ず。曹山代わつて曰く、古より今に至るまで人の并じ得る無し。疎山代わつて云く、竜に水を出づるの機有るも、人に并じ得るの能無し。

・有閑名 カスみたいなものがかくつついてる。

・白槌 問答の始終に槌を打つ。今は終わりの合図。

・無人得他肯 誰がどう言おうと、洞山からよろしいと言ってもらえる人は有り得ない。

・張三季四他人事 張とか李とかはわしの知つたことではない。

・雲居代云 石霜に代わつて。

・并得 これが洞山だと見わけること。

問う、如何なるか是れ正問正答。師曰く、口裏より道わず。僧曰く、是くの如きの人の問う有らば、和尚は還た道つや。師曰く、汝問うも也た未だ曾つて問わず。

・有如是人問云 口裏からでない問い方をする人があつた時はおっしゃいますか。

問う、如何なるか是れ病。師曰く、警起是れ病。進んで曰く、如何なるか是れ藥。師曰く、続がざる是れ藥。

・警起 ちらりと心念が起ること。

洞山、僧に問うて曰く、什摩処より来たる。对えて曰く、三祖の塔頭より来たれり。師曰く、既に祖師の処より来たれり、老僧を見んことを要めて什摩をか作す。对えて曰く、祖師は則ち別なるも、学人と和尚とは別ならず。師云く、老僧は闍梨の本来の師を見んと欲す、得たりや。对えて曰く、亦た須らく師自ら出頭し来たつて始めて得べし。師云く、老僧は適来暫時不在。

・祖師則別、学人与和尚不別 祖師は死んだ、われわれは生きている。

・欲見闍梨本来師 お前さん三祖をどう見て来たか。

・亦須師自出頭来 これが洞山だといつところを出して下さい。

・老僧適来暫時不在 わしは丁度いま居ないんだ。

問う、承るらく教中に言つ有り、誓つて一切衆生を度して、我は則ち成仏せん、と。此の意は如何ん。師曰く、譬えば十人同じく選せられて、一人及第せざれば九人惣べて得ず、一人若し及第すれば九人惣べて得ざるが如し。僧曰く、和尚は還た及第するや。師曰く、我は書を読まず。

・我不讀書 讀書しないから試験を受ける資格もない。士大夫ではない、ど百姓だ。

師、僧に問う、名は什摩ぞ。对えて曰く、専甲。師曰く、阿那个か是れ闍梨の主人公なる。对えて曰く、現に和尚に祇対する即ち是。師曰く、苦なる哉、苦なる哉。今時の学者例して皆な此くの如し。只だ驢前馬後を認めて、自己の眼目なりと将当す。仏法平沈すとは即ち此れ便ち是なり。客中の主すら尚お弁じ得ず、作摩生か主中の主を弁じ得ん。僧問う、如何なるか是れ主中の主。師曰く、

闇梨自ら道取せよ。僧云く、某甲若し道い得れば則ち是れ客中の主ならん。師曰く、与摩に道うは則ち易きも、相続することは則ち大いに難し、大いに難し。雲居代わつて云く、某甲若し道い得れば、是れ客中の主ならざらん。

・ 苦哉苦哉 やり切れん、やり切れん。

・ 驢前馬後 驢前馬後漢。うまかた。

・ 将当 くと見なす。

・ 平沈 陸沈にほぼ同じ。陸に生きていながら水の底に沈んだような生き方。初めは良い意味であつたが悪い意味に転化。

・ 即此便是 これこそがその例だ。

・ 客中主 現に祇対するところ。

・ 弁得 知る、見分ける。

・ 与摩道 その答え。

・ 相続 そのあと、発展。

師、雪峯に問う、汝は何処に去くや。对えて曰く、嶺に入り去る。師云く、汝は飛猿嶺より過ぐるや。对えて曰く、過ぐ。師曰く、来たる時は作摩生。对えて曰く、亦た彼の処より来たる。師曰く、一人の飛猿嶺よりして便ち者裏に到らざる者有り、作摩生。对えて曰く、此の人には来去無し。師曰く、汝は還た此の人を識るや。对えて曰く、識らず。師曰く、既に識らず、争でか来去無きを知らん。雪峯無对。師代わつて云く、只だ識らざるが為に、所以に来去無し。

・ 識 会つ、顔を知っている。

師有る時曰く、仏向上事を躰得して方めて些子の語話の分有り。僧便ち問う、如何なるか是れ語話の分。師曰く、語話する時は闇

梨は聞かず。僧曰く、和尚は還た聞かや。師曰く、我の語話せざる時を待ちて則ち聞かん。

・分 資格。

・待我不語話則聞 わしが語話しなくなつたら闇梨が聞かだろつ。

師有る時云く、直に須らく万里無寸草の処に向いて立つべし。人有りて石霜に拳似す。石霜云く、門を出づれば便ち是れ草。師、拳するを聞きて云く、大唐国内に能く幾人か有らん。

・出門便是草 師への批判と自分の生き方。万里無寸草処を設定したことが便是草とも言える。

・能有幾人 石霜のような人が。

師拳す、塩官の法会に一僧有り、仏法有ることを知るも、身づから知事と為り、未だ修行することを得ざるに、大限將に至らんとし、鬼使の来たりて僧を取らんとするを見る。僧云く、某甲身づから主事となり、未だ修行することを得ず。且く七日を乞う、得たりや。鬼使云く、某甲去きて王に白すを待て。王若し許さば七日を得て後に方始はじめて来たらん。若し許さざれば須臾にして便ち来たらん。鬼使七日の後に方めて来たりて、僧を覓め得ず。人有りて問う、他若かれし来たる時、如何んが他に祇對せん。師曰く、他の覓め得ることを被れり。

・知事 寺務役。

・大限 死。

・他若来時 鬼使がもし来た時。

・被他覓得也 その僧は鬼使にさがしあてられた。

僧有り曹溪より来たれり。師問う、六祖は黄梅に在りて八个月確を踏めりと説くを見る、虚なりや、実なりや。对えて曰く、但だ八箇月確を踏むのみに非ず、黄梅も亦た曾つて到らず。師曰く、到らざるは且く従まかず、従上如許多の仏法は什摩いすこ処より得来たれるや。对えて曰く、和尚は還た曾つて仏法を將原文に欠くつて人に与えしや。師曰く、得たることは則ち得たるも、即ち是れ太だ人に抵突す。師代わつて曰く、什摩の劫中に曾つて失却し来たれるや。中招慶代つて云く、和尚は什摩処に稟受せるや。

・ 非但八箇月踏確 八ヶ月確を踏まなかつたのみならず、非但不曾八箇月踏確の意味のはしよつた言い方。非但の次には否定の語は漢文では来にくい。それで省いた。間違つた漢文。

・ 和尚還將仏法与人不 和尚さんは仏法を人に与えたことはないんですね。

・ 師代曰 对曰云に代わる。

・ 太抵突人 無遠慮すぎる。抵突は、人に突つかかる、何でも反対する。

問う、如何なるか是れ古人百答して而も一問無き。師曰く、清天の朗月。如何なるか是れ今時百問して而も一答無き。師云く、黒雲雲皚皚。

・ 古人 一人でなくとも良い。

・ 百答 森羅万象がすべて答となる。自然法爾的なところ。

・ 黒雲雲皚皚 清天朗月をかくす。

問う、師は什摩の道理を見て便原作更ち此の山に住せるや。師曰く、两个の泥牛の闘いて海に入り、直に如今に至るまで消息無きを見る。

・泥牛 土牛、春牛。

・入海 自分を消すこと。現在の自分の世界から出てしまつ。

問う、百千の諸仏に飯せんよりは、一の無修無證の者に飯せんに如かず。未審いざかし、百千の諸仏に何の過有りや。師曰く、過無し。只だ是れ功勲辺の事なるのみ。僧曰く、功勲に非ざる者如何ん。師曰く、保任すること有るを知らざる即ち是なり。

・飯百千諸仏云 四十二章經に「飯千億三世諸仏、不如飯一無念無住無修無證之者」と言ふ。

・保任 明かすべき一大事が有ると心得る。作仏という目的を設定して、それを一大事と心得る。

問う、承るらく、和尚に言うこと有り、人をして鳥道を行かしむ、と。未審し、如何なるか是れ鳥道。師曰く、一人にも逢わず。僧曰く、如何なるか是れ行。師曰く、足下無系にし去る。僧曰く、是れ本来人なること莫きや。師曰く、閻梨は什摩に因りてか顛倒する。僧云く、学人に何の顛倒有りや。師曰く、若し顛倒せざれば、徐は什摩に因りてか奴を認めて郎と作せる。僧曰く、如何なるか是れ本来人。師曰く、鳥道を行かず。

・鳥道 祖庭事苑四「鳥道猶虚空也」。

・足下無系去 土を踏まずに歩く。糸は麻ぐつの糸。

・認奴作郎 奴隸を主人と取りちがえる。はなはだしい見当ちがいをする事。

問う、六国寧からざる時如何ん。師曰く、臣に功無し。僧曰く、臣に功有る時如何ん。師云く、国界安清なり。僧曰く、安清なる後如何ん。師曰く、君臣道合す。僧云く、臣の転原作傳（身せし）後如何ん。師曰く、君有るを知らず。

・君臣道合 道において合する。

・ 臣転身後 臣であつて臣でない。

問う、知識出世し、学人に依有り。遷化し去る後は如何にしてか諸境の惑を被らざるを得ん。師曰く、空中の輪の如し。僧曰く、今時妄の起こるを争奈何んせん。師曰く、正に焼却するに好し。

・ 正好焼却 今がちょうど焼き時だ。

問う、和尚出世して幾人か仏法を肯重する。師曰く、実に一人の肯重する無し。僧曰く、什摩と為てか肯重せざる。師曰く、他は各各氣字の王の如きに相似たり。

・ 他各各氣字如王相似 一人一人けつこうな肯重ぶりだ。

雲居に問う、汝は色を愛づるや。对えて曰く、愛です。師曰く、汝は未だし、好与。雲居却つて問う、和尚は還た色を愛づるや。師曰く、愛づ。居曰く、正に与摩に色を見る時作摩生。師曰く、一団の鉄の如似し。

・ 未在 いまだし。在は強辞。

・ 好与 しっかりやんなさい。さよなら。与は意味のない副詞語尾。

・ 如似 如と似との複合したもの。

師、僧に問う、名は什摩ぞ。对えて曰く、請う和尚、名を安けよ。師自ら良价と称す。僧無对。雲居代わつて云く、与摩ならば則ち学人に出頭する処無きなり。又た云く、与摩ならば則ち惣べて和尚に占却せらるることを被る。

師、太長老に問う、一物有り、上は天を拄え、下は地を拄え、常に動用中に在り、黒きこと漆の如し、什摩に過在するや。対えて曰く、動用に過在す。師便ち出で去れと咄す。石門代わつて云く、覓め得ず。有る人進んで曰く、什摩と為てか覓め得ざる。石門云く、黒きこと漆の如し。

因みに雪峯、柴を般はこぶ次いで、師問う、重きこと多少ぞ。対えて曰く、尽大地の人も提不起なり。師云く、争でか這裏に到ることを得ん。雪峯無對。雲居代わつて云く、這裏に到つて方はめて提不起なることを知れり。疎山代つて云く、只だ這裏に到らば、豈に是れ提得起なりや。

・柴 まき。

・提不起 持ち上げられない。

・只到這裏、豈是提得起摩 ここに到りさえすれば、持ち上げられたということではありませんか。提得起は提不起の逆の表現。

一僧有りて到り参ぜり。師は見て異として起ち来たり、礼を受け了つて問う、何方よりして来たる。対えて曰く、西天より来たり。師曰く、什摩時に西天を離れしや。曰く、齋後に離れたり。師曰く、太遅生。対えて曰く、迤邐して遊山翫水来たり。師曰く、即今作摩生。其の僧進前し、又手して立てり。師乃ち祇揖して云く、喫茶し去れ。

・異 ただ者ではない。

・太遅生 おそ過ぎる。

・迤邐 遊戯三昧。

・即今作摩生 今はどうだ。

・祇揖 ちよつと手をこまねく。

・喫茶去 茶を飲みに行け。出直してこい。

師、僧に問う、什摩処よりか来たる。僧云く、遊山し来たる。師曰く、還た頂上に到れるや。曰く、到れり。師曰く、頂上に還た人有りや。对えて曰く、人無し。師曰く、与摩ならば則ち閻梨何ぞ且らく住せざる。对えて曰く、某甲は住するを辞せざるも、西天に人有りて肯わず。

・何不且住 私のところに少しとどまって行かんかね。何不は、どうしてして行かないのか、して行ったらいいのに、の意。

師、雲居に問う、什摩処に去き来たれるや。对えて曰く、山を踏み去り来たれり。師曰く、阿那个の山か敢えて住せん。对えて曰く、阿那个の山か敢えて住せざらん。師曰く、与摩ならば則ち大唐国内の山は惣べて閻梨に占却せられらん。对えて曰く、然らず。師曰く、与摩ならば則ち子は入門することを得たり。对えて曰く、路無し。師曰く、若し路無くんば、争でか老僧と相見することを得ん。对えて曰く、若し路有らば、和尚と生を隔てん。師曰く、此の子、已後千万人も把不住ならん。

・阿那个山敢住 お前さんにとってここなら住していいという山があるのか。

・阿那个山不敢住 どの山だつて住しようと思えば住めない山はない。

・不然 そんなことではありません。

・把不住 つかまえられない。

師、泐潭に到り、政上座の衆の為原作請に説話して、也た大いに奇なり、也た太(原作太)いに奇なり。道界は不可思議なり、仏界は不可思議なり、と云つを見る。師便ち問う、道界仏界は則ち問わず、且らく道界仏界を説くが如原文になしきは是れ什摩人ぞ、只

だ一言せんことを請う。上座良久して言無し。師催して云く、何ぞ急ぎ道わざる。上座云く、争うことは即原作則ち得ず。師云く、道うも也た未だ曾つて道わず、什摩の争うことは即ち得ずとか説かん。上座無對。師曰く、仏と道とは只た是れ名字なるのみ、何ぞ教を引かざる。上座曰く、教は什摩と道うぞ。師曰く、意を得て言を忘るゝと。上座云く、猶お教意を將て心頭に向かえば病と作る。師曰く、道界仏界を説く者は病むこと多少ぞ。上座、茲に因りて疼れり。

・何不急道 早く言つたらどうだ。

師、雪峯に問う、什摩処に去き來たる。對えて曰く、槽を斫り去り來たれり。師曰く、幾斧もて成るを得たるや。對えて曰く、一斧もて便ち成れり。師云く、那邊の事作摩生。對えて曰く、手を下す処無し。師曰く、此は猶お是れ這邊の事なり、那邊の事作摩生。雪峯無對。疎山代わつて云く、斫斧無きに墮せず。

・無下手処 私の手ではどうにもなりません。

・此猶是這邊事 斧を使う人が残っているところを言う。

問う、單刀直入して師の頭を取らんと擬する時如何ん。師曰く、堂堂として辺表無し。僧曰く、今時羸劣なるを争奈何んせん。師曰く、四隣五舍、誰人か之無からん。暫く侶店に寄る、什摩の恠しむ可きに足らん。

・無辺表 どこが胴やら頭やら、足やら手やら分からない。辺表は目じるしとなるものをいう。

・侶店 はたご。侶は旅に通じる。

大師又た学徒に勧めて曰く、天地の内、宇宙の間、中に一宝有りて、形山に秘在す。物を識りて靈照、内外空然たり。寂莫として見る事難く、其の位は玄の玄なり。但だ己れに向かつて求め、他より借ること莫れ。借るも亦た得ず、捨つるも亦た堪えず。惣へ

て是れ他心、自性に如かず。性如は清淨、即ち是れ法身なり。草木の生ずるも、見解は此くの如し。住止するには必ず須らく伴を択ぶべし、時時に未聞を聞かん。遠行するには良朋を仮らんことを要す、数数耳目を清めん。故に云う、我を生む者は父母、我を成す者は朋友、と。善者に親しむ者は霧裏に行くが如く、衣を湿さずと雖も時時に潤有り。蓬の麻竹に生ずるや扶けずして自ら直く、白砂の泥に在るや之と俱に黒し。一日師と為せば終世天と為る。一日主と為せば終身父と為る。玉は琢せざれば器と成らず、人は学ばざれば道知らず。

・草木之生、見解如此 草木成仏についても考えは同じだ。

・一日云 大公家教に「一日為君、終日為主。一日為師、終身為父」とある。

師、病僧に問う、不易、闍梨。対えて曰く、生死事大、和尚。師曰く、何ぞ粟菴裏に向かつて去かざる。病僧曰く、若し与摩ならば則ち珍重せよ。峭然として便ち去れり。

・不易 大変だね。

・闍梨、和尚 呼びかけが後に来るのは珍しい例。伝灯録八洞安和尚伝に「師云、善為、闍梨」という例がある。

・若与摩則珍重 そついうことならお別れしましょう。

・峭然便去 ひっそりとそのまま果てた。

問う、一切皆な放捨し、猶お未生の如き時如何ん。師曰く、一人有りて闍梨の手の空なることを知らず。

・一人 那一人。

師、衆に示して云く、諸方に驚人の句有り、我が這裏に刮骨の言有り。時に人有りて問う、承るらく、和尚に言うこと有り、諸方

に驚人の句有り、我が這裏に刮骨の言有り、と。豈に是ならずや。師曰く、是なり。將ち来たれ、汝が与に刮せん。僧曰く、四方八面、請う師刮せよ。師曰く、刮せず。僧曰く、幸いに是れ好手なるに、什摩と為てか刮せざる。師曰く、汝は道つを見ずや、世医は手を拱ねく、と。

雲門、西峯に到る。西峯問う、某甲只だ洞山刮骨の言を聞くのみにして、周旋するを得ず。請う上座、某の与に撃し看よ。雲門具さに前話を陳べたり。西峯便ち合掌して云く、与摩に周旋するを得たり。雲門拈じて西峯に問う、洞山の前話に道つ、將ち来たれ、汝が与に刮せん、と。寶家第二機にし来たるに、什摩と為てか刮せずと道つや。西峯沈吟せし後に云く、上座。上座応諾す。西峯曰く、堆阜なり。

・刮骨　グサリと中に切り込む。扁鵲が骨の毒を刮り取って治してやった故事。

・將來　骨を出せ。

・四方八面　どこなりと。自分の骨のどこが傷んでいるか分かってない。

・不刮　おことわりだ。

・幸是好手　せつかくの名医だのに。

・世医拱手　三代続いた医者、名医は手を動かさないで治す。

・不得周旋　完全な形では聞いていない。周旋は紹介すること。

・得与摩周旋　お見事なご紹介を得まして。洞山に対するお礼。

・寶家第二機来、為什摩道不刮　第二機にし来たるような者のためには刮ってやってもよきそうなのに、どうして刮らずと言ったのか。第二機は第二の質問、四方八面。

・沈吟　考え込む。

・堆阜　ちよつと盛り上がった岡。ケチな岡みたいなものだ。土が盛り上がっているだけだ。

師、衆に示して曰く、展手して学び、鳥道にして学び、玄路にして学ぶ。宝壽肯わずして、法堂の外に出でて道く、この老和尚は什摩の事の急なる有りて。雲居便ち和尚の処に去きて問う、和尚与摩に道うに、一人の肯わざる有り。師曰く、肯う者の為に説けり。肯わざる底の為にせず。只だ肯わざる底の人の如きは、伊かれをして出頭し来たらしめよ、我は見んと要ます。居云く、肯わざる底無し。師曰く、闇梨は適来道えり、一人の肯わざる有り。什摩に因りてか肯わざる無しと道うや、更に道え。居云く、出で来たれば則ち肯うなり。師曰く、灼然たり。肯えば則ち肯わず、出づれば則ち出でず。

・ 有什摩事急 下を略した言い方。どんな大層なことがあつてゝしたのか。

・ 只如不肯底人 しかしまあ肯わないようなのが有れば。

問う、古人言う有り、青青たる翠竹は尽く是れ真如、鬱鬱たる黄花は般若に非ざるは無し、と。此の意如何ん。師曰く、世に露わならず。僧曰く、什摩と為てか世に露わならず。師曰く、色に遍ねからず。僧曰く、什摩と為てか色に遍ねからざる。師曰く、是れ真如ならず、亦た般若無し。僧曰く、還た彰わるるや。師曰く、世に非ざればなり。僧曰く、世に非ざる者如何ん。師曰く、某甲は則ち与摩に道う、闇梨は如何ん。对えて曰く、会せず。会を將て闇梨に与えん。僧曰く、和尚は什摩と為てか施設せざる。師曰く、看よ看よ、奈何んともせず。僧曰く、什摩と為てか承当し得ざる。師曰く、汝は什摩と為てか他の言かつ有るに泥むや。僧曰く、与摩ならば則ち言かつ無し。師曰く、言かつ無きには非ず。僧曰く、言かつ無きは什摩と為てか却つて非なる。師曰く、是れ言かつ無きならざればなり。

・ 翠竹黄花 祖庭事苑五に竺道生の語とし、故事を記す。

・ 師曰非世 一応ここで商量は終わっている。

・ 看看不奈何 てつきり手がつけられん。

・ 為什摩承当不得 どうして私を手がつけられんと考えられるのですか。

問う、相い逢うて擎げ出ださざるも、意を拳ぐれば便ち有ることを知る、此の意如何ん。師は合掌して頂戴せり。報慈拈して僧に問う、只だ洞山の如きは、口裏に与摩に道いて合掌して頂戴せるや、只だ与摩に是れ合掌して頂戴せるや。僧無对。自ら代わつて曰く、一脉両中。

問う、清河の彼岸は是れ什摩の草ぞ。師曰く、不萌の草なり。僧曰く、渡河して就く者如何ん。師曰く、一切都べて尽く。師又た云く、不萌の草、什摩と為てか能く香像を蔵する。香象なる者は今時の功の果を成すなり。草なる者は本来不萌の草なり。蔵なる者は本より円満の行相を認めず、故に蔵と云う。

・ 一切都尽 渡つたことも、渡つた者も一切。

・ 香象者 以下のちに加えた注が。

一尼有り、僧堂前に到りて云く、如許多そこばくの衆僧、惣べて是れ我が兒子なり。衆僧道い得ず。人有りて師に拳似す。師代わつて云く、我が因の生む所なり。

・ 我因所生 私の因が生んだものだ。私という因が……。

僧有り、鉢を持して家常す。俗人問う、上座は今の什摩をか要むる。僧云く、什摩をか揀ばん。俗人、草を將て鉢盂を満たし著して云く、上座若し解よく道い得れば則ち供養せん。若し道い得ざれば則ち且らく去れ。其の僧無对。人有りて師に拳似せり。師代わつて云く、這個は是れ揀ぶ底、揀ばざる底を把り將ち来たれ。

・家常「家常」と言った。家常飯の略。平生の食へもの。托鉢する時の掛声。

・満鉢孟著 普通は満著と直接つながる。

師、僧に問う、心法雙つながら亡びて性は則ち真なり。是れ第幾座ぞ。対えて曰く、是れ第二座なり。師曰く、什摩と為てか他に第一座を与えざる。僧曰く、心に非ず法に非ず。師曰く、心法雙つながら亡び、是れ心に非ず法に非ざるなり。何ぞ更に是くの如く道つや。師代わつて曰く、真に非ざれば座を得ず。

・心法雙亡性則真 證道歌の語。

・是第幾座 という境地の人は。

・何更如是道 今さらそんなことを言つ必要はなかつ。

問う、如何なるか是れ父は少し。師云く、閻梨は春秋多少ぞ。如何なるか是れ子は老ゆ。師曰く、某甲尋常、人に向かつて玄なりと道い去る。

・父少子老 法華経從地涌出品の語。『禪語辞典』の「一老一不老」の項参照。

・道玄去 玄と言つことにしている。

問う、古人に言つこと有り、但だ神を以て会し、事を以て求む可からず、と。此の意如何ん。師曰く、門より入る者は室に非ず。曰く、門より入らざる者如何ん。師曰く、此中は人の領覽する無し。

問う、心法滅する時如何ん。師曰く、口裏に道い得るも什摩の利益か有らん。口頭に信せて弁ずること莫れ。直に与摩にし去るを

得て始めて得。設たと使といと与と摩とにし去るも也た是れ仏辺の事なり。学進んで曰く、請う師、个この仏向上の人を指示せよ。師曰く、非仏。

・設使 以下、或いは学人の言葉か。

問う、四大違和す、還た病まざる者有りや。師曰く、有り。僧曰く、病まざる者は還た和尚を看るや。師曰く、某甲、他を看るは則ち分有り。他誰たれか某甲を彩せん。僧曰く、和尚は病めり、争あでか他を看得ん。師曰く、某甲若し看るときは則ち病有るを見ず。

・看 看病。

・他誰彩某甲 誰が私をかまってくれるか。他は接頭語で意味なし。たれ、あたれ。彩は採に痛じる。取り合あつ人間についてのみ言いつ。否定の形で言いうのが普通。不採。不理文語。睬さいの字を使いつこともある。

・和尚病、争看得他 病気の和尚さんがどうして彼を看病できますか。

・某甲若看則不見有病 わしの看病の仕方は、病を見ないという看病の仕方だ。

問う、正に与摩なる時如何ん。師曰く、是れ閻梨の窠窟。僧曰く、与摩ならざる時如何ん。師曰く、顧占せず。僧云く、顧占せざる、是れ和尚の重んずる処なること莫なきや。師曰く、顧占せざるに什摩とか重んぜん。僧曰く、如何なるか是れ和尚の重んずる処。師曰く、拳を撃うけて閻梨に向わず。僧曰く、如何なるか是れ学人の重んずる処。師曰く、合掌して某甲に向かうこと莫なれ。僧曰く、任摩ならば則ち相あい干せざるなり。師曰く、誰か徐なと相あい識しる。僧曰く、畢竟如何ん。師曰く、誰か肯なえて大なを作なし、誰か肯なえて小なを作なす。

・窠窟 固定した住処。

・顧占 不詳。顧には、かえりみる、評価するといった意味がついて廻る。

・不撃拳向閻梨 なぐられんうちにさっさと行ってしまえ。

・任摩則不相干也 となるともう取り付く鳥がありません。

・誰共徐相識 それではお前と相い識るのは誰だ。共は前置詞、．．．と．．．と共にとは読まない。

・誰肯作大、誰肯作小 作大作小するのは一体だれだ。お前の主人公はどこに行った。作大は、えらぶる、おごる。人を見下げたようなことをする。作小は、卑下する、卑屈になる。いずれも俗語。

問う、牛頭未だ四祖に見えざる時、百鳥、花を銜えて供養する時如何ん。師曰く、珠の掌に在るが如し。僧曰く、見えし後、什摩と為てか花を銜えざる。師云く、通身にし去れり。

・通身去也 身体全体のものになつて行つた。

問う、如何なるか是れ無心意識底の人。師曰く、無心意識人に非ず。僧曰く、還た参請し得るや。師曰く、曾つて人の伝語するを聞かず、曾つて人の囑託するを受けず。僧曰く、還た親近し得るや。師曰く、但た闇梨一人なるのみには非ず、老僧も亦た得ず。僧曰く、和尚は什摩と為てか得ざる。師曰く、是れ無心意識人ならざればなり。

・非無心意識人 ほんとうの無心意識底人はお前の問うような人ではない。

・不曾^云 そういふ人からまだ申し出がない、また会つてやつてくれと言つて来たひともない。

・還親近得也無 近づきになりたいと言つて来た時、うんと言われるか。

・老僧亦不得 わしだつてそんな人と近づきになることはできん相談だ。

・不是無心意識人 無心意識人でないからだ。

問う、蛤中に珠有り、蛤は還た知るや。師曰く、知れば則ち失わん。僧曰く、如何にすれば則ち得ん。師曰く、前言に依ること莫

れ。

・如何則得 どうしたらよろしいか。

・前言 さっきのお前の言葉。蛤中有珠云。

問う、古人に言うこと有り、虚空の心を以て、虚空空の字原文になしの理に合す、と。如何なるか是れ虚空の理。師曰く、蕩蕩として辺表無し。如何なるか是れ虚空の心。師曰く、物を挂けず。如何にしてか合し去るを得ん。師曰く、闇梨与摩に道うときは則ち合せざらん。

・古人 不詳。

問う、古人に言うこと有り、仏病は最も治し難し、と。仏はれ病なるか、仏に病有るか。師曰く、仏はれ病なり。僧曰く、仏は什摩人の与に病と為るや。師曰く、渠かれの与に病と為る。僧曰く、仏は還た渠を識るや。師曰く、渠を識らず。僧曰く、既に渠を識らず、争でか他の与に病と為ることを得ん。師曰く、你還た聞道きくや、他の門風を帶累す、と。

・仏病最難治 四百四病猶可治、心病最難治という諺をひねったものが。

・你還聞道 お前は聞いたことがあるだろう。

・帶累 めいわくをかける、連累。俗語。

問う、語中に的を取る時如何ん。師曰く、的に什摩をか取らん。僧曰く、与摩ならば則ち的中の非なり。師曰く、非中に還た的有りや。

・取 つかみとる。

・ 的かなめ。

・ 的中取什摩 なにを取ろうとこのか。そついうことなら的中からはだめだ。

・ 非中還有的也無 質問者の硬直性をつき崩そうとする。

師、僧に問う、一人有り、千万中に在りて一人に向かわず、一人に背かず、此れ喚んで什摩とか作す。僧曰く、此の人常に目前に在りて、境に随わず。師曰く、闍梨の此の語は是れ父辺に言えるや、子辺に道えるや。对えて曰く、某甲の所見に拠れば、父辺に向いて道えり。師、肯わず。師は却つて典座に問う、此は是れ什摩人ぞ。对えて曰く、此の人は面背無し。師、肯わず。又た別に対えて曰く、此の人は面目無し。師曰く、一人に向かわず、一人に背かざれば便ち是れ面目無きなり。何ぞ必ずしも更に与摩に道わん。師代わつて曰う、氣息を絶ちし者。

・ 向父辺道 父の立場で言っているのです。

・ 此人無面背 まともな答えになっていない。説明に過ぎない。

問う、一切処に乖かざる時如何ん。師曰く、此は猶お是れ功勳辺の事なり。無功の功有り、子は何ぞ問わざる。僧曰く、無功の功は是れ那邊の人なること莫きや。師曰く、已後有眼の人の闍梨の与摩に道いしを笑わん。僧云く、与摩ならば則ち調然たらん。師曰く、調然は調然に非ず、調然ならざるに非ず。僧曰く、如何なるか是れ調然。師曰く、喚んで那邊の人と作すことは則ち得ず。僧曰く、如何なるか是れ非調然。師曰く、弁ずる処無し。

・ 一切処 行住坐臥。

・ 調然 那邊に対して出た語であるが、不詳。洞山録は迢然とする。

師、驀に侍者を喚ぶ。侍者来たれり。師良久して云く、大衆に伝語せよ、寒き者は火に向かえ、寒からざる者は上堂し来たれ、と。

師、時有つて衆に謂いて曰く、這裏は直に須らく句句不斷にして始めて得べし。長安路上の諸道に信耗の絶えざるが如似し。若し一道の不通なる有らば、便ち是れ君を奉ぜざらん。此の人は命、懸糸の如し。直饒い勝妙の事を学得するも、亦た是れ君を奉ぜざるなり。豈に況んや自余に什摩の用処か有らん。人間の小小の名利の為に、大事を失うこと莫れ。仮使たとい模を起し様を画き、片衣口食を覓め得るも、惣べて須らく奴婢と作るべし。他に償うこと定まれり。專甲敢えて保す。先徳云く、其の諸類に随つて各おの分育有り、と。既に人身を得て、的として皮衣土食せず。任運隨縁して住著を生ずること莫れ。專甲の家風は只だ此くの如し。肯うと肯わざると、終に闇梨を抑勒せず。一に東西するに任ず。珍重。

・ 句句不斷 那邊の消息を伝える点でどの句もどの句もつながっている。

・ 信耗 信耗。おとづれ、音通。

・ 諸類 生きとし生けるもの。

・ 分育 限り。

・ 既得人身 その限りの中で吾々は人間の身を得た。

・ 的 たしかに。

・ 皮衣土食 着物を着ないで土から生えているものを喰うだけ。野蛮人。

・ 任運 六朝頃の語。当時、運は化とほとんど同義語。委運はもう少し古い。

・ 終不抑勒 決して束縛をしない。

・ 一任東西 どこへ行こうと勝手にしなさい。

師、咸通十年己丑の歳三月一日より、剃髮被衣し、鍾を撃たしめ、儼然として往けり。大衆号慟せり。師復た覺して曰く、夫れ出家兒なるものは、心に依らざる、是れ眞の修行なり、何ぞ悲戀すること有らん、と。則ち主事の僧を呼び、愚癡齋を弁せしむ。主者仰戀し、漸く齋筵を弁じ、七日に至りて備われり。師も亦た少しく食いて日を竟れり。師云く、僧家何ぞ太だ麤率なる。臨行の際、喧慟すること斯くの如きとは、と。

八日に至りて開浴せしむ。浴し訖つて端座して長往せり。春秋六十二、僧夏四十一なり。悟本禅師慧覺の塔と勅謚せり。勗勵の偈頌等並びに参徒の宝篋笥に通流す。此中には録せず。

浄修禅師讚して曰く、師は洞山に居り、五百の衆を聚む。眼処に声を聞き、境縁は夢の若し。磻畔の貞筠、天辺の瑞鳳。三身に墮せず、吾は此に於いて痛む。

漸源和尚、道吾に嗣ぐ。師諱は仲興。未だ実録を觀ざれば、終始を決せず。

師因みに道吾に隨いて檀越家に往き、相看して乃ち手を以て棺木を敲ちて問う、生くるや、死せるや。吾云く、生くるも亦た道わず、死せるも亦た道わず。師云く、什摩と為てか道わざる。吾云く、道わず、道わず。師、肯わずして陽溪に去けり。一宿する次いで、半夜に便ち惺悟し、声を出だして啼哭して寺に歸りたり。和尚便ち歡喜し、自ら來たりて迎接せり。

・棺木 かんおけ。

師、石霜に到り、鍬子を將ちて、法堂前に向いて、過ぎ來たり過ぎ去れり。霜云く、什摩をか作す。師云く、先師の靈骨を覓む。霜云く、洪水滔天して流浪し去れり。師云く、与摩ならば則ち正に著力するに好し。霜云く、我が這裏は剗針の地無し、侷は何摩処に向いてか著力せん。後、太原の孚上座代わつて云く、先師の靈骨猶お在り。

- ・洪水滔天、流浪去也 大水で流されてしまった。
- ・与摩則正好著力 そういうことならこの鍬にも言わせるにもって来いです。著力は努力。
- ・無劊針之地 針をさす地さえない。

石霜和尚、道吾に嗣ぐ。師諱は慶諸 吉州新塗の人なり。俗姓は陳。年十三にして洪州の西山に於いて出家す。年二十にして嵩山に於いて受戒せり。廻りて道吾に參ず。

道吾問う、一人有りて出入の息無し、速かに道い將ち来たれ。師云く、道わず。云く、什摩と為てか道わざる。師云く、口を將ち来たらす。

師、年三十五にして石霜に止まり、更に他遊せず。洞上の指唱を為し、避くるも獲ず、乃ち法寺に旌せり。四海の玄徒奔り湊り、日夜圍遶原作達す。師走りて深山に避くるも而も免るる能わず。衆復た尋いで出でて圍栲し、半戴の間に近きも、師に異説無し。然り而つして門の推す可き無ければ、師、已むを獲ず。乃ち僧有りて杖子を將ちて上る。其の僧云く、師に一条の杖を奉る。其の形に九曲有り。曲は則ち今時の為にす。上下長きこと多少ぞ。師云く、我は出頭せずと道つ。僧云く、什摩と為てか出頭せざる。師云く、汝は長きこと多少なるかを道つや。大衆一時に云く、得たり、得たり。師云く、汝若し与摩ならば、我に一句子有り、天下人の舌頭を盖却せん。僧拈じて師に問う、如何なるか是れ天下人の舌頭を盖却する底の句。師云く、更に老僧をして一転の話を答えしむる可かり。

- ・圍栲 不詳。

問う、真身は還た出世するや。師云く、真身は出世せず。僧曰く、真身を争奈何んせん。師云く、琉璃瓶子の口。

・ 出世 世俗の世界に出て来る。あるいは石霜が山に隠れていたことに掛けたか。

・ 争奈・・・何 どうしようもない、どうしますか、ほっとけないでしょう。

・ 琉璃瓶子口 口は出入の処。

問う、仏性は虚空の如き時如何ん。師曰く、臥する時は則ち有り、坐する時は則ち無し。

師有る時云く、我向前、一老宿の処に在り。个の師僧有りて同じく夏を過ごせり。夏満ちて請益して云く、乞つ和尚、个の正因を指示せよ。他かの老宿云く、徐、洒束すること莫れ、正因中には一字も也た無し。纔かに与摩に道うや、便ち失声し、齧齒すること両三下し、与摩に道いしことを悔いたり。一老宿有り、窓を隔てて聞き乃ち云く、好个の一鑊の羹、不浄物もて汚著して什摩をか作す。福先拈じて僧に問う、如今須らく他の正因に符すべし、汚著するを得ず、作摩生か道わん。僧無対。福先自ら代わつて云く、汝は向後、我を恠著するを得ず。進んで曰く、忽もし道伴に逢わば作摩生か拳せん。先云く、但だ別人に問い去れ。

・ 洒束 気がせく。

・ 纔 くしたとたん。

・ 好个一鑊羹、不浄物汚著作什摩 ひとなべの好き吸い物の中に不浄物を入れてどうするのだ。作什摩は詰問の言葉。

・ 不得恠著我 わしを怒つてはいけない。

・ 但 それしかない。

病僧問う、劫火洞然たる時如何ん。師云く、来时、有ることを知らず、去るも亦た伊かれに任まか従す。僧曰く、即今羸劣なるを争奈何ん

せん。師云く、須らく病まざる者有ることを知るべし。僧云く、病むと病まざると相い去ること幾何ぞ。師云く、悟らば即ち分寸無く、迷えば則ち山岐を隔つ。僧云く、前程の事如何ん。云く、黒きこと漆に似ると雖然も、成立することは今時に在り。此の僧峭然として便ち去れり。

・任從伊 劫火の好きなようにさせておく。

・争奈即今羸劣何 じゃあ死にかかっている私のこの身体をどうしたらいいでしょう。

・成立在今時 もうすでに出来上がっている。

師、張拙秀才に問う、汝の名は何ぞ。對えて曰く、張拙。師云く、世間の文字に什摩の限り有りてか、什摩の拙と名づけたる。對えて曰く、今の巧処を覓むるに不可得なればなり。師云く、也た只だ是れ今の拙なるのみ。

張秀才に偈有りて曰く、光明寂照して恒沙に遍く、凡聖含靈共に一家なり。一念生ぜざれば全軀現れ、六情纔かに動けば雲に遮ぎらるることを被る。煩惱を遣除して重ねて病を増し、真如に趣向するは亦た是れ邪なり。境縁を逐うに任せて望し得る無く、真如凡聖は是れ空花。

・也只是个拙 なるほど拙としかつけようがないな。

問う、道吾の忌日なるに和尚は何ぞ齋を設けざる。師云く、我は他に因りて三寸無きことを得たり、所以に這个を將て供養せず。人有りて禾山に問う、古人云く、我は他に因りて三寸無きことを得たり、所以に這个を將て供養せず、と。未審し什摩を將て供養するや。禾山云く、三寸無きことを將て供養す。僧云く、古人は何ぞ摩と為てか這个を將て供養せずと道いしや。禾山云く、汝は何ぞ摩を喚んで這个と作すや。

・三寸 舌。

円茶頭問う、志円は什摩と為てか奈何んともする勿き。師云く、但だ一個のみには非ず、闔国の人も亦た奈何んともする勿し。進んで曰く、和尚は如何ん。師云く、我も亦た奈何んともする勿し。進んで曰く、師は是れ人天の師なり、什摩と為てか奈何んともする勿き。師云く、老僧曾つて他の顔色を得ず、我をして作摩生ならしめん。

・他顔色 他は一般を指す定冠詞的用法。顔色というもの。顔色は色(ルーパー)のこと。

師、座主に問う、教中に道う、智を以て知る可からず、識を以て識る可からず、と。此は是れ什摩人の次第なりや。对えて曰く、此は是れ讚法身の言なり。師云く、法身是れ讚なり、何ぞ必ずしも更に讚せんや。座主無对。

・教中道 涅槃無名論。

・次第 状況、境地。

・法身是讚 法身ということ自体讚め言葉だ。

問う、忽し人有つて、百年の後什摩処にか去ると問わば、作摩生か他に向かつて道わん。師云く、但だ他に向かつて道え、二十年在世するもの一千五百人なり、と。又た云く、会するや。对えて曰く、会せず。師云く、且らく帰堂し去れ。

師、大光に問う、今時を除却して還た更に異時有りや。对えて云く、渠も亦た今日是れなりと道わす。師云く、我も亦た今日に非ずと道わんと擬す。

・我也擬道非今日 彼にならつて云いたいと思つている。

雲峯、少師に問う、什摩処にか歸する。對えて曰く、江西なり。峯曰く、江西は那裏ぞ。對えて云く、石霜なり。雪峯拳す、石霜病い重き時、新到二百來人有り、未だ和尚に參見せずして、惆悵として声を出して啼哭せり。石霜、監院に問う、是れ什摩人の哭声ぞ。對えて云く、二百來の个の新到、和尚に參見するを得ず、此れに因りて啼哭す。師云く、他を喚び來たれ、窓を隔てて相看せん。侍者便ち他を喚ぶ。新到一際に上來し、窓を隔てて礼拝し、問う、咫尺の間なるに什摩と為てか尊顔を靚ざる。師云く、遍界に曾つて蔵れず。雪峯、此の話を拳して、師を讚めし後問う、遍界に曾つて蔵れず、是れ什摩界ぞ。對えて云く、是れ什摩の問いぞ、和尚。峯云く、問いに横豎有り、是れ徐、什摩に因りて与摩に道つや。学人会せず。又た問う、衷情に祇対す可き無し。

峯、一首の偈を造りて曰く、何怜に徒らに子に懃るにす、時人は徐の昏きを笑わん。神清みて鏡の如く像り、迴然として物と分つ。

師、僧に問う、什摩処より來たる。對えて云く、雪峯より來たれり。師云く、什摩の仏法の因縁有りや、徐拳し看よ。其の僧便ち拳す。和尚、衆に示して云く、三世諸仏も唱うる能わず、十二分教も戴不起にして、三乗の教外に別伝す、十方老僧の口、這裏に到りて百雜碎と。師便ち失声して云く、什摩をか作すに堪えん、早くも徐は驀頭に拗却せらるることを被れり。

・教外別伝 出扱として一番早い。

・百雜碎 こつぱみじん。

・驀頭拗却也 顔をねじあげられた

師又た云く、此くの如しと雖然も、我も也た一向にせず。其の僧便ち問う、雪峯は意旨如何ん。師云く、我は道つ、人を夢みて思いよとい近からず、と。徐は作摩生。

問う、十方同一会、共に何事をか譚する。師云く、三寸上に在りて、何処に事の在ること有りや。僧曰く、豈に撥端する者無から

んや。師云く、時人は眼齊しからず。

- ・ 在三寸上、何処有事在 言葉という次元では、一体どこに事があるか。三寸は舌のこと。
- ・ 撥端 事の糸口を出す。

問う、如何なるか是れ芥子、須弥を納る。師云く、双双なることは佗の双双なることに聴す^{まか}。

- ・ 聴佗 好きなように。

問う、臣の功有るや、王は何物をか賜う。師云く、目を転ぜず。

- ・ 不転目 目も動かさない。まつ毛一本動かさない。

師、僖宗皇帝の、特に紫衣を降さるるより、堅く退けて受けず。光啓四年戊申の歳二月十日遷化せり。報齡八十、僧夏五十九なり。平章事孫偓(原作偓)碑文を撰す。普会大師見相の塔と勅謚す。

祖堂集卷第六

